NPO法人日本教育カウンセラー協会機関誌第55号　日本教育カウンセリング学会第49号　2019年3月1日発行

教育カウンセラー

JECA
JSEC

CONTENTS

巻頭言・吉田隆江　1
学会第16回研究発表大会報告　2
学会紹介シリーズ㉒・日本学級経営心理学会　5
実践研究シリーズ㉔・柳瀬啓史　6
ICTを用いた授業と教育カウンセリング・齊藤勝　10
特別寄稿・LINEカウンセリング・飯島修治　12
公認心理師試験の感想・安齊順子　13
現場訪問シリーズ㉕・森　憲治　14
活動報告・日本教育カウンセリング学会　15
ご案内・学会第17回研究発表大会（10月５・６日）　16
・協会設立20周年記念行事（５月19日）
・教育カウンセリングCollege（６月９日）

巻頭言

河野先生と，つなげていこう

NPO法人日本教育カウンセラー協会理事
吉田　隆江

2019年１月12日～14日まで，日本教育カウンセラー協会主催の２泊３日のSGE体験ワークショップが開かれた。講師の１人として参加しながら，毎年新春のSGEを楽しみにしていた國分康孝先生が，昨年ひょこっとお１人でいらしたことを思い出し，胸が詰まる思いになった。

「俺は90歳までやるぞ」「俺はSGEが好きなんだぁ」と嬉しそうに語り，親との別れに苦しむ参加者には「人生には限りがあるんだ。だからその中でなすべきことをせよ，っていうのが，SGEの考え方にあるんだぞ」としみじみ語りながら，諭してくださった。

そういえば，先生が85歳を過ぎたころから，会議やワークショップが終わった後の会で，「俺がいなくなってもみんな仲良くやってくれよ」などとおっしゃるようになった気がする。縁のあった人はみな教え子だから，共にヒューマンリレーションを創って，それぞれが支え合ってほしいというお気持ちを，さりげなく伝えていらした。

「人生はワンネスだ。自分と他者で一体感を作っていく。慈愛の精神だ」とおっしゃった先生の人生集大成の思いを「河野先生とつなげていこう!!」というのが，いま私が伝えたいことである。つまり，教育カウンセラー協会会長の河野先生と共に，各支部，学会の人たちが互いを知ろうとし，互いの足しになることをして，互いの存在を認め合いながら，共に成長し合える集団でいよう！　ということである。

國分先生が困ったとき，それを支えてきたのが河野先生だと，私は思っている。河野先生は「私はカウンセリングは知らないんですよ」とおっしゃる。正直，率直な方である。しかし，教育カウンセリングの根幹をなす「学習に関する研究」の大家である。学習は児童・生徒にとっての中心的な重要な悩みの一つである。それをどう援助するのかは，その授業の進め方にかかっているとも言える。授業研究の仕方や授業分析の仕方など，先生と共に学べたら，視野は広がるはずだ。

また，１月のSGEでは，河野先生がおっしゃるとおりのことが起こっていると実感した。河野先生は，キリスト教を広めたパウロを例にあげ，「これから，國分先生を知らない世代にも伝えていこう」とおっしゃっていた。パウロはキリストの死後に信仰の道に入り，キリスト教発展の基礎を作ったと言われている。そう，「國分先生にお会いできなかった」「よく知らないんです」という人が参加していたのである。

國分先生を知らなくても，國分先生と久子先生が育ててくれた，教育カウンセリングやSGEがいいと思ってくださる人はいるのだと実感できる。嬉しいことではないか。共に学びたいと思う。

さあ，河野先生とつなげていこう！　そして広げていこう!!

■報告■ 第16回日本教育カウンセリング学会研究発表大会

研究発表大会（愛知大会）御礼

坂柳　恒夫
愛知教育カウンセリング研究会会長
愛知教育大学名誉教授

第16回日本教育カウンセリング学会研究発表大会（愛知大会）を，平成30年11月24日（土）・25日（日）の両日，愛知県名古屋市の「愛知県産業労働センター（愛称：ウインクあいち）」にて実施しました。ご多忙のなか，全国各地から多数のご参加をいただき，感謝申し上げます（大会参加約250名・公開講座参加約330名）。

教育カウンセリングは，「育てるカウンセリング」に軸足を置いています。また，社会の激しい変化に流されることなく，それぞれが直面するであろうさまざまな課題に柔軟かつたくましく対応し，社会人・職業人として自立していくことができるようにする教育が求められています。そこで，愛知大会のメイン・テーマを「発達課題に応える教育カウンセリング～生き抜く力を育てるために～」としました。

記念講演では，石隈利紀先生（東京成徳大学教授）より，学校心理学の視点から，子どもの発達課題に応える教育カウンセリング，チーム学校の促進について，ご教授いただきました。また，公開シンポジウムでは，日本福祉大学堀美和子准教授，キャリアコンサルタント柴田朋子先生，なごや子ども応援委員会坂野誠先生から実践をお話しいただきました。

さらに，自主シンポジウム・ミニ研修会11件，口頭発表19件，事例発表18件，ポスター発表30件と多数の研究発表があり，愛知大会を盛り上げていただきました。それぞれの研究発表が，「学校現場で活用できるものばかりである」と好評でした。

愛知大会は，平成の時代として最後の大会となりました。大会の開催・運営にあたって，故國分康孝先生はじめ学会理事長・理事の皆さま，関係の皆さま方に多大なお力添えをいただきました。行き届かないところもありましたが，おかげさまで愛知大会を成功裏に終えることができ，愛知大会実行委員一同，感謝しております。ありがとうございました。

開会式

記念講演

発達課題に応える教育カウンセリング
～チーム学校の促進を通して～

東京成徳大学　石隈　利紀

「子どもが育つには１つの村が必要である」というのはアフリカの格言です。すべての子どもが発達する過程で，家族・学校・コミュニティの援助が必要です。今日，虐待・貧困など家族にかかわる苦戦，自然災害など，学校教育の枠組みの外で起こることが，子どもの発達に大きな影響を与えています。今回の講演では，学校心理学の視点から，子どもの発達課題に応える教育カウンセリング，そして「チーム学校」の促進についてお話しします。

1　学校心理学とは

学校心理学は，一人ひとりの子どもの学校生活の質の維持・向上を支える「心理教育的援助サービス」の理論と実践の体系であり（石隈，1999），教育カウンセリングの枠組みとして有用です（國分，2018）。心理教育的援助サービスは，子どもが「学習面，心理・社会面，進路面，健康面」の課題に取り組むうえで出合う問題状況や危機状況における援助であり，子どもの発達を促進する活動です。

日本の心理教育的援助サービスは，教師が中心となり，スクールカウンセラー，保護者らとの協働で進められてきました。心理教育的援助サービスのモデルとしては，「４種類のヘルパー」「３段階の心理教育的援助サービス」「３層のチーム援助」などがあります。そして心理教育的援助サービスの焦点は，「レジリエンス（生き抜く力）の発達」と「キャリア（よりよく生きる態度）の発達」だと思います。

2　チーム学校

2015年，中央教育審議会答申で，学校教育の改革の方針として「チームとしての学校（チーム学校）」が打ち出されました。チーム学校には，学校内での教職員の組織的連携という側面と，学校・家庭・地域の連携という側面があります。

チーム学校には３つの柱となる方針があります。第１に，教職員の横の連携強化です。SCやSSWを「専門スタッフ」として位置づけ活用します。第２に，マネジメント体制の充実です。校長・副校長・教頭・事務長をリーダーとする縦の連携強化と言えます。第３に，教職員の働く環境の改善です。人材の育成も関係する課題です。子どもの発達課題に応える教育カウンセリングの基盤としてチーム学校を充実させるために，①教育相談部会，特別支援教育の校内委員会，学校保健委員会など「コーディネーション委員会」の活用，②新しい「日本型のチーム」づくり，③成熟した職業である教師の仕事の見直しが求められます。

3　教育カウンセリングへの提案

教育カウンセリングの発展のために３つ提案します。
①カウンセリングから援助へ
②カウンセリングから教育へ
③カウンセリングからレジリエンス・キャリア支援へ

公開シンポジウム　話題提供

○大学と学校が協働するうえでの現状と課題

堀　美和子（日本福祉大学子ども発達学部）

大学と学校とが連携した取り組みは，現在発達支援に限らず，多様な目的，多様な形態で行われてきています。中でも特別支援教育に関連する取り組みは，学校・児童生徒・大学それぞれのニーズに応じた多様な実践が活発に行われている領域のひとつであり，その成果も示されています。しかしニーズが多様であるからこそ，適切な協働といった視点から見ると，課題も残されています。

本報告では，いくつかの視点から，特別支援教育の場を中心とした大学と学校との活動の形を整理したうえで，報告者がかかわってきたいくつかの取り組みが紹介されました。特に，複数の形態で実施してきた，学生が学校に学生支援員などの形で参加する活動について，報告されました。

○未来を生きる子どもたちと向き合うために大切なこと

柴田　朋子（JUNO キャリアコンサルタント）

１　わたしの立場

キャリアコンサルタントという仕事は「職業」（稼ぐことだけに限らない）と個人の関係課題に悩む人たちを支援することが使命です。組織で働く社会人の「今」にかかわり，変化を肌で感じながら，一方で大学教員やキャリア教育を担う人として，小中学校の現場にも入っています。

２　労働社会の変化について

労働集約型の社会構造から，AI やRPA などの仕組みにより大きな変化に向かっている現在，一昔前にはエリートとされた職業もどんどん「仕組み」に乗り換えられ，職業地図も大きく塗り替わっています。

３　なにが足りない？　なにが過剰？

１と２を総合して考えたとき，大人が子どもたちの「生きる力」を育成するために，足りないこと，過剰なことが見えてきます。

○なごや子ども応援委員会

坂野　誠（名古屋市教育委員会子ども応援室）

１　なごや子ども応援委員会設置の背景

名古屋市では，常勤のスクールカウンセラーをはじめとする３職種と，非常勤のスクールポリスからなる専門的知識・経験をもったスタッフを平成26年４月より配置しています。

２　なごや子ども応援委員会を構成するスタッフ
・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー
・スクールアドバイザー・スクールポリス（非常勤）

３　なごや子ども応援委員会の具体的な活動
・幅広い相談対応
・教員と協働し，児童生徒の問題の早期発見
・家庭，地域，関係機関との連携
・未然防止につながる取り組みの支援

自主シンポジウム

○学校危機対応における養護教諭の役割

大久保牧子

ミニ研修会

○人間関係を広げるSGE
～『フレンドカード』を使って
SGE研究G

○自律性支援の指導力向上を目指すワークショップ
水上和夫

事例研究発表（クローズ）

○登校しぶりのある児童への養護教諭のかかわり
――FR式不登校対応チャートを活用して
竹吉也寿子

口頭研究発表（オープン）

○高校生の自尊感情と学校生活適応感の比較とその変化
吉澤克彦

ポスター発表

情報交換会

○乾杯

○第16回実行委員会スタッフ

○第17回開催予定地（早稲田大学）のスタッフを理事長が紹介

閉会式

○サイエンティスト・プラクティショナー賞授賞式

○次年度開催挨拶

初めて研究大会に発表した感想

群馬県立館林高等学校定時制教諭　**長岡　昇汰**

「無我夢中でエンカウンター」これが私の発表をスーパーバイザーの先生が咄嗟に批評してくださった言葉です。「無我夢中でやっていることが実は理に適っている」という言葉も嬉しかったです。自分が尊敬する先生に憧れ，何はともあれ良いクラスをつくりたいと夢中でエンカウンターに取り組んだことが間違っていなかった。と同時に，場当たり的な自身の実践を恥じ，理論を勉強する必要性も痛感しました。

今回の愛知大会の自主シンポジウムにおいて，初めて発表の機会をいただきました。豊富な経験をおもちの先生方を前に，果たして自分が適任なのだろうかと危惧しながら名古屋へ向かったのですが，終わってみれば，多くの叱咤激励や温かなコメントをいただき，感謝の気持ちでいっぱいです。

私が参加させていただいたシンポジウムのタイトルは「生涯発達を支えるための教育カウンセリング」でし

た。人々の生涯にわたる発達を支えるために，エンカウンターを中心とした教育カウンセリングの技法がどのようにいかせるのか，学校のみならず，大学教員やスクールカウンセラーの視点からも実践が発表されました。

今回の自主シンポジウムに参加して改めて感じたことは，年代にかかわらず，人との関係構築に課題を感じている人がたくさんいるということ，その課題解決のために教育カウンセリングの技法が役に立っているということです。私は今まで学校現場で生徒を対象にした実践しか学んだことがありませんでした。しかし大学や幼稚園，母親学級，保護者会などでの事例を聞き，指導者も学習者も，さまざまな環境において，エンカウンターを中心としたワークが人とのかかわりを円滑にする一助となっていることがわかりました。

同時に，発達段階を考えたときに，中学・高校がいかに重要であるかを再認識することができました。大人への愛着を形成する「子ども」と，社会の一員として働く「大人」の間にあって，思春期はそれまでの幼かった価値観が揺らぎ，自分を見つめ，大人や社会への信頼をもう一度取り戻さなければならない時期です。ここでの経験が生涯にわたって自分を支えてくれる反面，ややもすると，世の中に対して絶望したり自信を喪失したりしてしまう時期でもあります。

そんな中学・高校時代にあって，信頼できる友人や大人との出会い，自分を受け入れてくれる集団の存在が重要でないはずがありません。私は定時制高校において，仲間づくりやクラスのリレーションづくりを目的として，エンカウンターを取り入れてきました。しかし，今回のシンポジウムに参加して，高校における教育カウンセリングの手法をいかした実践が，「生涯発達」という観点から見ても有意義であることがわかりました。

結びにあたり，今回発表の機会を与えてくださった新潟県の笠井敬祐先生，発表の場で同席させていただいた先生方，私の拙い実践に共感と拍手をもって勇気を与えてくださった全国の先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

学会紹介シリーズ22

日本学級経営心理学会

1　はじめに

「日本学級経営心理学会」は，2012年３月に誕生した，大変若くて活気のある学会です。

現在の会員数は約200名です。特別支援学校・小学校・中学校・高等学校・高等専門学校・短期大学・大学に所属する教員，事務職員，都道府県や市町村教育委員会事務局職員（充指導主事や指導主事，管理主事等），スクールカウンセラー，教育相談員など，幅広い校種，職種で活躍中の会員で構成されています。

元中央教育審議会委員で名古屋大学名誉教授(元早稲田大学教授)の安彦忠彦先生に顧問をしていただいており，理事長には早稲田大学教育・総合科学学術院教授河村茂雄先生が創立以来就かれています。顔のわかる会員同士で，新しい知見や，時代とともに刻々と変化する教育課題について，協働して解決策を考え，日本の学校教育の向上に寄与できるように研修・研究を重ねています。顔がわかる・主体的に参加するメンバーで活動していきたいという願いがあり，会員は200人を超えないようにしています。

2　学会活動，学会誌の発行

本学会は，毎年３月初旬に，早稲田大学早稲田キャンパスに全国から集い，講演会やシンポジウム，会員一人一人の実践を意見交換し，知識とやる気を充電しています。何より同じ志をもって活躍している会員から元気をもらい，次の１年間の活躍のエネルギーとしています。また，毎年２回，日本学級経営心理学会報として，『学級経営心理学研究』を発行し，会員の研究成果を全国に発信しています。

以下，当時の学会設立準備委員会が示した本学会「設立趣意書」の抜粋を紹介させていただきます。ご賛同いただければありがたいです。

3　日本学級経営心理学会設立趣意書（抜粋）

「2006年の中央教育審議会の答申では，学級経営についての力量を，教員志望者に教員養成の段階から確実に身につけさせることを，答申の４つの柱の中のひとつとして盛り込んでいます。しかし，2000年以降，学級集団や学級経営に関する研究は少ないのが現状であり，かつ学校現場では，教師たちの学級経営の展開や指導行動のあり方について，一定の方針が見えず混とんとしているのが現状ではないでしょうか。そこで，小・中・高・大学の教職員・カウンセラー・教育関係者のような学校教育に携わる人々と研究者が参集し，学級経営及びその近接分野における，集団や人間関係の相互作用を活用した教育や支援のあり方について，研究会や研修会を通して意見や情報を交換する，さらには，研究成果を発表しあう，そのような場として，『日本学級経営心理学会』を発足させることにしました。」

会費は3,000円で，会員みんなで協働しながら高め合う，名より実をとる，学習する組織をめざして活動しているのが，日本学級経営心理学会です。

（文責／名古屋産業大学現代ビジネス学部教授　水谷明弘）

実践研究シリーズ―㉔

自己の成長を促進させる「マイチェックシート」の活用

――教育カウンセリングの特質を活かしたキャリア教育の実践――

公立小学校（高知）教諭　柳瀬　啓史

1　はじめに――研究に至る背景

就労課題への対応策として登場したキャリア教育が，生きる意欲や態度の形成を意図する「一人ひとりのキャリア形成と自己実現（文部科学省，2016）」へ路線を変更させている。学校が，自律的に学び続ける子どもを育成する場として期待されている表れだろう（藤田，2014）。新学習指導要領では，学習の歩みを経年重ねる「キャリアパスポート（仮称）」の提示も目を引くが，「学びのプロセスを記述し，振り返る，ポートフォリオ的な教材」としか提示されておらず，今後，学校現場での戸惑いも予想される。先行作成・実施する自治体も増えているが，「将来何になりたいか」「自分の好きなところ探し」等を記述させる内容に終始し，類似した内容となっている（兵庫，愛知，大阪，広島，等）。

これまでにも同様の活動は見られたが，単発での実施や，どの学年でも同内容の取り組みといった実情も見られ，自己の内面を問い，改善に主旨を置くプログラムとして確立しきれたとは言い難い。むしろそういった面は，教師にとっては「問題点の修正」や「規律を直す」といった，指示的・治療的な側面で行われてきた。

将来を展望し，自己成長を促進させる前向きな学習を計画的に行えるなら，児童にとって「自己実現に必要な能力の育成（白木）」として期待がもてるだろう。キャリアパスポートの雛型が未確定の現在だからこそ，自己の成長過程を記録し，将来を展望する活動教材として，「マイチェックシート」を提案したい。

2　実践内容

ここでは，筆者が学級担任を務める小学校５年の１クラス（男子：17名，女子：11名。計28名）にて，筆者が作成した「マイチェックシート」を活用し，女児と学級集団の変遷を通して，子どもの自己成長を促進させるツールとしての有効性を検証することとする。

【対象児童】女児Ａ……人前ではほとんど喋らず（医療診断はない），学習にも消極的。友達とのかかわりが苦手。担任の投げかけに対しても，首をかしげたり表情を変える程度であり，１週間に１日の割合で欠席を重ねていた。

【学級の様子】……友人関係は温厚で，大きなトラブル等の経緯もない。しかし学級開きの直後から，担任は例年の高学年児童とは異なる「言い表しにくい違和感」を覚えていた。その表現は経験則からであり，具体性に欠けるものである。その後５月に実施したQ-Uの結果から，学級全体にまとまりが見られず，かかわりが十分に形成されていない状態が見てとれ（Fig.1），違和感に納得ができた。

Ａの個人得点状況（Fig.2）からわかるように，学級への一定の安心感はあるものの，気持ちを許し合う友人の不足が予測された。同時に，これはＡだけの課題ではなく，学級全体の課題であるととらえ直した。

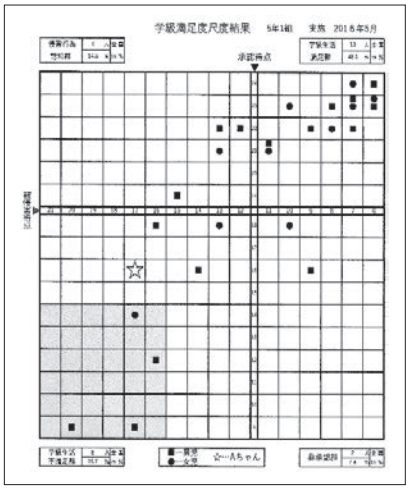


Fig.1 Q-U 結果
（１回目：５月）
学級得点

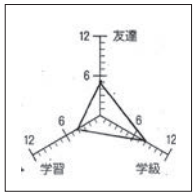


Fig.2
Q-U 個人得点
（１回目：５月）

担任の手立てとして，國分・河村（1996）の指摘に習い，

①日常的に児童相互のかかわり場面を増やし，
②対話のある授業に取り組み（ペア・グループ，協働作業，ジレンマ教材・ジグゾー学習等），
③自己を振り返り，見通しを立てるキャリア教育を日常的に行うこと

を掲げた。リレーションを深めつつ，一人ひとりの意欲の高揚をめざすことがねらいである。「友人からの評価」

等と併用して試みることにした。

3　マイチェックシートの手順

○1回目（4月実施）（Table 1）

昨年（4年生時）の自分を振り返り，「よくがんばった点」「あまりよくなかった点」を，それぞれ3点ずつ挙げてみる。それを眺め，自分なりの気づきを記入する。

次に，本年度1学期中に
①絶対にのばす事
②できればのばしたい事
③うまくいけばのばしたい事
を考えて記入する。同様に，
①絶対に直す事
②できれば直したい事
③うまくいけば直したい事
を記入する。すべてが整うと，全体を見渡して1学期をどんなふうに頑張っていくのかを自分なりに考え，記入する。

○2回目（7月実施）

4月に作成したシートが縮小され，その上下左右に新しい欄が書き足されている。1学期全体の自己の歩みを振り返り，内省をする。4月と同様，「のばしたい事」「直したい事」を3点ずつ考え，2学期を見通して記入する。

○3回目（12月実施）

前回と同様に，2学期全体の自分の行動を振り返り，3学期の「のばしたい事」「直したい事」の見通しを立てて目標を設定する。前回までのシートが縮小され，添付されている。

○4回目（3月実施）（Table 2）

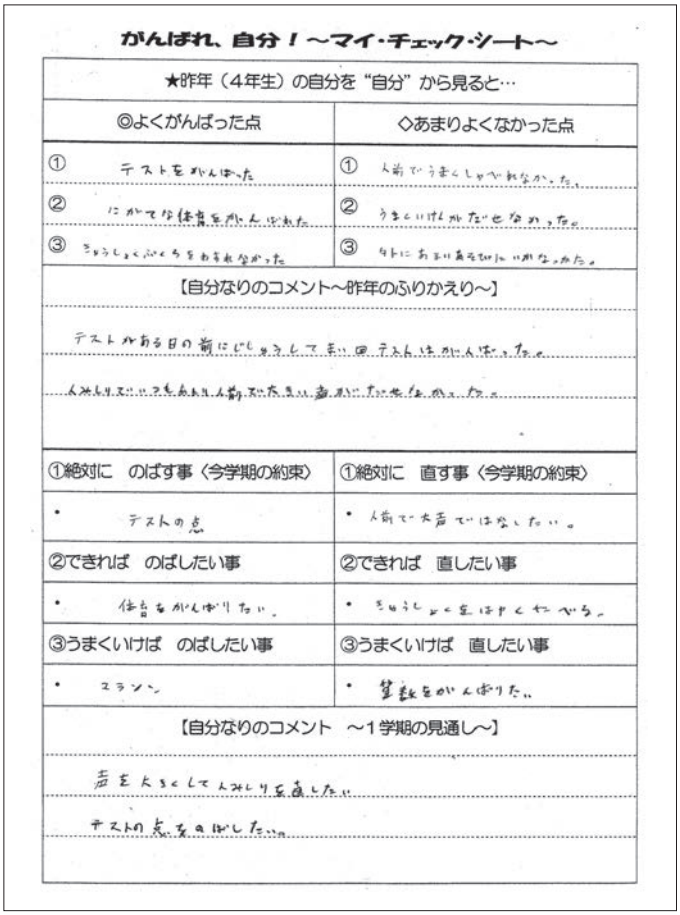
1年間の自分の思いと行動を振り返り，来年の見通しを立てる。次年度を，どのような1年として過ごしたいか，どんな自分になりたいかを熟考，記入する。

1年間の自分の思いと行動を振り返り，来年の見通しを立てる。次年度を，どのような1年として過ごしたいか，どんな自分になりたいかを熟考，記入する。

4　経　過

4月時点（1回目実施）で，「声を大きくして，人見知りを直したい」と既に記されている。Aの母親はこの点を問題視する気持ちはなく，むしろ指摘しないでほしいと担任に訴えていたし，学校でもマイナス面ととらえつつも，「この子の特徴だから」と，留意してこなかった。

Table 1　「マイチェックシート」4月実施（1回目）


がんばれ、自分！～マイ・チェック・シート～

★昨年（4年生）の自分を“自分”から見ると…

◎よくがんばった点	◇あまりよくなかった点
① テストをがんばった	① 人前でうまくしゃべれなかった。
② にがてな体育をがんばれた	② うまくいけばなだせなかった。
③ きゅうしょくぶくろをわすれなかった	③ 4月にあまり友だちがいなかった。

【自分なりのコメント～昨年のふりかえり～】

テストがある日の前にじゅうしてまい日テストがんばった。

人みしりでいつもあまり人前でたくさん声がでなかったな。

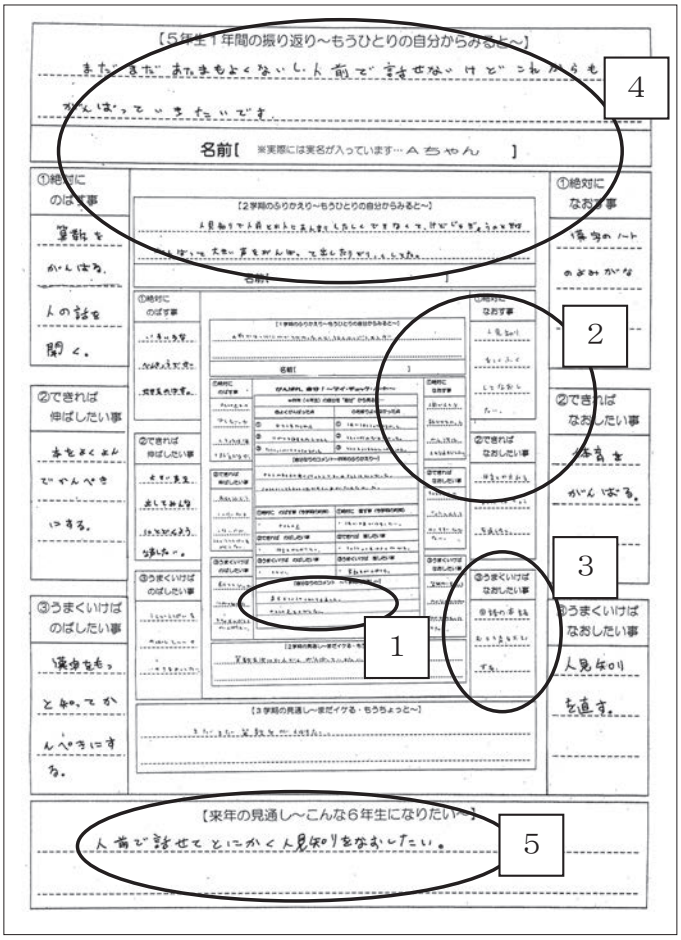
①絶対に　のばす事〈今学期の約束〉	①絶対に　直す事〈今学期の約束〉
・ テストの点	・ 人前で大声ではなしたい。
②できれば　のばしたい事	②できれば　直したい事
・ 体育をがんばりたい。	・ きゅうしょく生はやくたべる。
③うまくいけば　のばしたい事	③うまくいけば　直したい事
・ スランン	・ 算数をがんばりたい。

【自分なりのコメント　～1学期の見通し～】

声を大きくして人みしりを直したい

テストの点をのばしたい。

Table 2　3月実施（4回目：最終回）1年間のまとめ



しかし本人の中では，「なんとかしたい」思いをもち続けていたことが理解できる[1]。

２回目以降も，「①絶対に直す事」の項目には「人見知りを克服する」の内容が記載されてきている[2]。Aにとって「人見知り」「声を大きくする」ことは大きな欲求として心の中にあったことがわかる。

意識化はできても，すぐに結果が現れるものではない。それでも２学期には一定の満足感があったのか，人見知りの克服は３番目に降格している[3]。この点を担任が尋ねると，「みんなが褒めてくれたから，いいかなと思った」「勉強が大変になってきたから」と応えている。確かに１・２番目には漢字と体育を頑張ると記述している。共にAの苦手とする分野であることから，苦手克服の拡がりを見せたとも理解できる。

Table３　他者評価シート

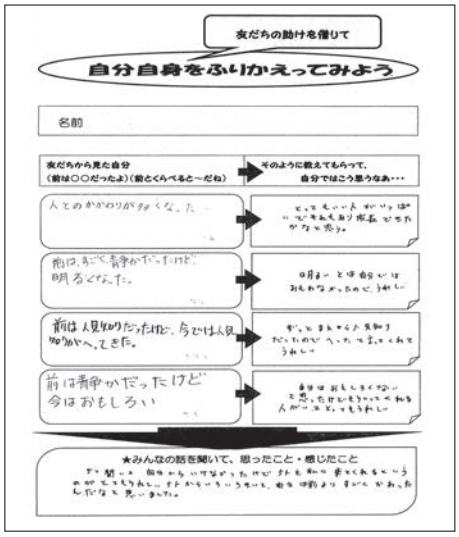
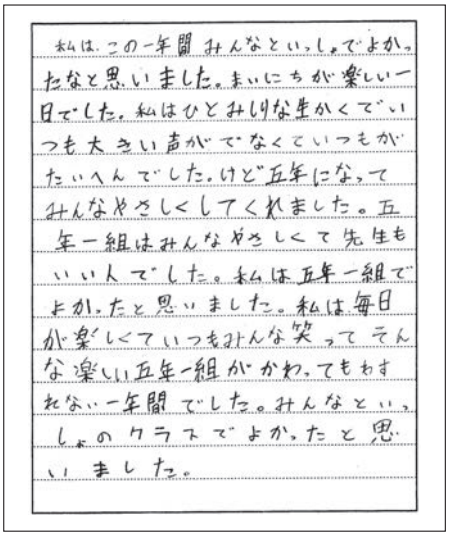


Table４　Aの言葉（文集）



３月（４回目）時点で，「まだ人前で話せない自分」を認識し，反省点にあげている。12月時点（３回目）でも出ているが，「授業のときには頑張って大きい声を出せた」と充実ぶりを書き記していることから，過去の自分と比べて成長を自覚しつつも，他者と比べて自分はまだ不十分，ととらえていることがわかる[4]。

６年生に向けての目標は，やはり「人前で話せて人見知りをなおしたい」。どうしても達成したい思いが見てとれる[5]。Aの心の内の強い思いが感じられる。

口に出すことはむずかしくても，心の中では欲求を抱き続けている点，それを記述で担任と対話することが可能である点が，この経過から理解できる。実際にシートを使って面談を重ねるなかで，声の大きさを友人に褒められた嬉しさと，やはり自分は声を出せない，と揺れ動く気持ちを語ってくれた。

担任は本シートを眺めながら，

①この１年頑張り続けてきた事実

②実際に声が大きく，反応が早くなっている事実

③10月に実施した別シートの「他者評価シート」（Table３）からも，①と②が明らかなこと

を確認し，支援を重ねた。

３学期には学習にも積極的にかかわる姿を見せ，休み時間にも男女問わず仲間とふざけ合う様子まで確認できた。「Aって，声も字も大きくなっとるね！」と，級友から称賛される機会も多くなっていた。

Aの成長に触発されたのか，学級集団の凝集性も様変わりを見せる（Fig. ３・５）。日常の生活・学習の両面に協働の場面を設定するたびに，自然なかかわり合いが可能となり，活発化が進んだ。次第に自治性の高まりへとつながり，12月には担任の援助を受けず，自分たちだけでクリスマス会を企画し，運営・集金・準備等を分担して成功させるに至った。

Aの前向きな変化は，学級内では自明のこととなったが，特に学習や友人関係への意欲や行動が顕著であり，それはQ-Uの結果でも明らかとなった（Fig ４・６）。

５年生終了時，クラス文集には，「みんなといっしょでよかったな」と，Aの言葉が記された（Table ４）。自分自身を，「ひとみしりな生かく（性格：筆者）で，いつも大きい声がでなくてたいへん」だったと素直に吐露している。これまで，声が出せない自分を表に出したがらず，隠す形で行動していたAにとって，大きな変化である。同時に，決して甘やかすことなく，しかし支え続けてくれたクラスメイトに対し，「みんなやさしくしてくれました」と感謝を記している。

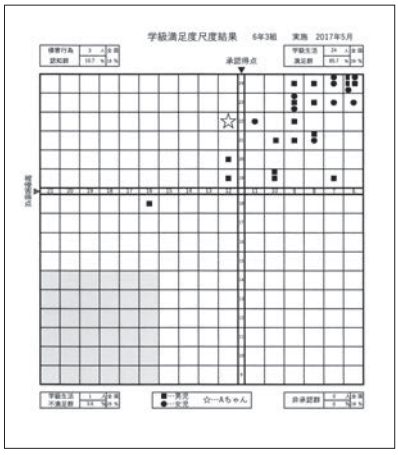


Fig.3 Q-U 結果
（２回目：10月）

学級得点

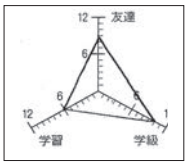


Fig.4
Q-U 個人得点
（２回目：10 月）

Fig.5 Q-U結果
（3回目：3月）
学級得点

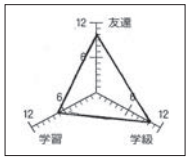


Fig.6
Q-U個人得点
（3回目：3月）

Table5　5年生時（上）・6年生（下）での欠席状況

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
欠席日数	3	6	1	0	5	1	1	1	1	2	5

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
欠席日数	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0

5　考　察

本シートに記述された記録は，少し前の自分が描いた目標や思いが残されているため，振り返るごとに自律的な見通しに役立つ。自分の言葉を軸にして行動化できる点は有意義であろう。学期という区切りごとに修正する機会があるのも，児童にとっての取り組みやすさがある。

担任にとっても，記録に残るものには目を通しやすい。児童の思いや活動の歩みが残されているため，軌道修正やアドバイスもしやすくなる。シートを囲んで，励ます・ほめる・再確認する……といった声かけやアドバイスが正確に働きかけられ，「この点は達成できているね」等と勇気づける材料にしやすい。教師からの「指導」という意味合いが軽減するのも利点である。

子どもたちが今後，上級の学校へ進学しても，将来どんな職種に身を置いたとしても，その過程でさまざまな困難や壁にぶつかることだろう。その際に，改善点や利点を見つめながら，身につけたスキルを発揮し，自分なりに乗り越えてほしいと願う。小学校にいる期間はそのスキル習得の期間であり，適切なサポートが保証される期間であるはずだ。

自らの「課題」として位置づけ，自らクリアしていく力を身につけることは，予防的カウンセリングの観点からも意味がある。マイチェックシートは「課題」を自己設定・自己解決してゆく自律的な活動をサポートする教材であると提案したい。

本レポートに記載したAの5年生時に併せ，6年生1年間の欠席日数を記載する（Table5）。この変貌からも，Aの成長は明白である。

6　今後の課題

本研究は，マイチェックシートを活用し，年間を通して自己成長を促す学習を確立する目的で試行した。その基盤には，相互支援の雰囲気のある学級風土を形成する点と，子ども個々の気づきに，日常的なサポートを保証する教師の支援が必要条件だった。

課題は2点あげられる。1つは，さまざまな学習活動と同時に行われているため，効果が本シート活用だけの結果とは特定できない点。2点目は，児童が俯瞰的に自己を見つめられているか，その評価と判断をどう設定するのか，である。そのために，本シートの有効性を客観的に測定する手立てが必要だと考える。

改訂も実施している。先述の課題1点目の，児童の記述内容への評価については，観点項目を定めたルーブリック評価を作成した。また，担任との面談がより円滑に行えるよう，各回に教師の記入欄を設けた。

今後も，子どもたちの反応を見ながら改訂を重ね，生き様に憧れ，将来を展望でき，それを友人と語り合える学級を創る実践を続けていきたい。同時に，キャリア教育の「生き方在り方」にかかわる側面について，本音で対話し合える学級集団の形成場面こそ，教師の教育カウンセリングのスキルが必要になると考えている。そのためにも自分自身が研磨研鑽を継続していきたい。

【引用文献】

○愛知県教育委員会『夢を見つけ夢をかなえる航海ノート』2012
○浅野信彦・伊藤友美『小学校におけるキャリア教育の現状と課題—実践からの示唆—文教大学教育学部』紀要　43　2009
○大阪府教育委員会「大阪府キャリアプログラム　社会とのつながり自立した子どもの育成を目指して」2011
○林泰成・白木みどり『人間としての在り方生き方をどう教えるか—小中高12年間を通した道徳教育・キャリア教育—』教育出版　27—31　91—93　2010
○兵庫県教育委員会『キャリアノート小学校1～6年生』2015
○國分康孝・河村茂雄『学級の育て方・生かし方』金子書房　21—23　1996
○広島県教育委員会『小学校版 わたしのキャリアノート』2011
○藤田晃之『キャリア教育基礎論——正しい理解と実践のために』実業之日本社　2014
○文部科学省「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）（中教審第197号）2016
www.mext.go.jp/a-menu/shotou/new-cs/1383986.htm

ICTを用いた授業と教育カウンセリング
――ICTを用いた授業で主体的・対話的で深い学びを促進する

帝京平成大学現代ライフ学部講師　齊藤　勝

1　インクルーシブ教育実現のための「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」

近年，子どもの多様性が注目され，いかにして子どもたちの多様な学びに柔軟に対応した学習指導・支援を実施していくかということが，喫緊の課題となっている。

2017年３月に改訂された新学習指導要領では，「主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと，個々の児童の多様な実態を踏まえ，一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方により，児童の発達を支援すること」とあるように，一人一人の子どもの教育的ニーズに応じたきめ細やかな指導や支援ができるようにすることが明記されている。

また，2016年４月に障害者差別解消法が施行され，全国の学校現場でも，多様な子どもの教育に対する合理的配慮が法的に求められることとなり，インクルーシブ教育の実現に向けた動きも進んできている。多様な子どもが１つの学級の中で共に学んでいくためには，子ども自身がどのように学ぶのか，学ぶ過程で何か困難はないか，人とかかわる過程で何か困難はないか，といったことを，教師が考えておくことが必要である。子どもの認知や社会性等の理解なしには「主体的・対話的で深い学び」の実現は不可能である。

河村（2018）は，障害のある子どもの観念の社会的障壁が形成されないように，学級集団づくりをする第一歩は，活動する目的は同じでも，それに向けて取り組む方法に最初から多様性をもたせておくことが必要であると述べている。

このようなことから，子どもの多様な学びのニーズを想定し，複数の手段を用意する。学習の目的を変えない範囲で代替手段を用意する際，電子黒板や書画カメラ，タブレット端末，デジタル教科書などのICTの活用が，子ども一人一人の学びの可能性を拡げるものとなる。よって，発達に課題のある子どもの「学びのつまずき」を想定し，授業をデザインしていくことが，今，求められているインクルーシブ教育に繋がるものだと考える。

新学習指導要領がめざす主体的・対話的で深い学びを実現するためにも，これまでのような「すべてがこうでなければならない」という硬直化した学習方略ではなく，「Aもよいが，Bもよい」という多様な発想と柔軟な思考が求められるだろう。

その際に拠り所としたのが，アメリカの研究団体CASTが提唱する「学びのユニバーサルデザイン」（Universal design for learning，以下UDL）である。UDLは，「学習環境の中に含まれる学びのエキスパート（expert learner）を育てる上での根本的な障壁，つまり，融通が利かず『全員一律で対応させようとさせる（one-size-fits-all）』ようなカリキュラムに対処するための枠組み」とされている（CAST，バーンズ亀山，金子，2011）。

このような中で，UDLの原則を使って高性能のデジタルテクノロジーを適用すると，学習者に合わせたカリキュラムのカスタマイズが，より簡単で効果的にできると言われている（CAST，バーンズ亀山，金子，2011）。

UDLは，学習の障害は子どもの中にあるのではなく，カリキュラムにあると考える。子どもの多様な学びのニーズを想定し，複数の手段を用意する，学習の目的を変えない範囲で代替手段を用意する，などのオプションを作成する。その中で特に，PCや電子黒板，タブレット端末，デジタル教科書などのICTの活用が推奨されている。

そこで，子ども一人一人の学びを保障し，主体的・対話的で深い学びを促進するために，UDLの視点に基づきICTを活用した授業実践を行った。

2　UDLの視点に基づきICTを活用した授業づくり

主体的・対話的で深い学びを実現するためには，どの子も学習の見通しをもって授業に集中し，わかる喜びとできる楽しさが感じられる授業づくりが重要である。そのために意識したことは，タブレット端末や電子黒板を活用した協働学習を意識的に展開することである。

まず，授業の導入で，プロジェクターでの課題提示により学習の見通しをもたせたり，見本動画の視聴により自己の課題をつかませたりした。ICTを活用し，簡潔且つ効果的に授業の導入を行うことで，授業の展開の時間を十分に確保することができる。

授業の展開場面では，初めに，タブレット端末を用いて自己の疑問を詳しく調べたり考えを表現したりするなど，自力で課題解決に取り組む個別学習を取り入れた。次に，ペアやグループで，タブレット端末に保存した動画や画像を見せながら教え合ったり，考えを伝え合ったりし，その後，全体で検討する協働学習を行った。ICTを活用すると，思考の可視化がしやすく瞬時に考えの共有ができる。そのため，個の考えを学級全体に繋いだり，思考活動を個やグループに戻したりすることが容易になる。また，ICTが発表を補助する役割を担うため，子どもは自己の考えを発表しやすくなり，発表への効力感を高めることができる。

3　UDLの視点を取り入れた体育科「跳び箱運動」の授業実践

UDLのガイドラインに示された３つの原則は，授業

を見直す重要なポイントを示してくれる。原則Ⅰは，「提示に関するオプション」（主に知覚や理解がしやすくなるような手立て），原則Ⅱは，「行動と表出に関するオプション」（意見の表出を容易にする，実行機能を高めるための手立て），原則Ⅲは，「取り組みに関するオプションの提供」（興味を引く，努力やがんばりを持続させる手立て）である（CAST，バーンズ亀山，金子，2011）。

原則Ⅰは，学習内容にアクセスする方法を十分に柔軟にすること，原則Ⅱは，子どもたちが学習過程で理解したことを表現するのに，さまざまな手段を使うことができるようにすること，原則Ⅲは，学習意欲を喚起し継続させるために，さまざまな手立てを講じることであり，この３つすべてを考慮していくことが重要である。

これら３つの視点を簡略化した形で体育科の授業にあてはめるならば，

○原則Ⅰは，視覚的，聴覚的に困難（バリア）のある児童にも，そうでない児童にも，わかりやすい課題提示や教材提示をすることができること

○原則Ⅱは，ポイントを明確化することで自分の考えを整理しやすくなり，わかりやすくアドバイスできること

○原則Ⅲは，動画コンテンツやデジタルポートフォリオを活用することで，跳び箱が苦手な児童でも，興味・関心や技能を高められること

である。

①　原則Ⅰ：「提示に関するオプション」を実行するための手立て

学習の見通しをもたせるために，プロジェクターを用いて，学習の流れや場の設定を視覚的に確認しやすいようにした。学習の流れがわからないと不安になる児童がいるので，今，取り組んでいる内容や次の活動を明確に示すことで，安心して活動に取り組むことができる。

②　原則Ⅱ：「行動と表出に関するオプション」を実行するための手立て

タブレット端末のカメラ機能を使って撮影したものを，２画面比較ソフトを活用し，手本となる動画コンテンツと自分自身の演技とを比較できるようにした。また，どのポイントを意識すれば技ができるようになるのかに着目させ，ペアやグループでかかわり，話し合ったり教え合ったりする際の補助ツールとして活用できるようにした。そのうえ，タブレット端末で撮影した映像を秒単位で遅延再生できるソフトを用いて，自分の跳んだ後の姿を確認しながら，繰り返し練習に取り組ませた。遅延再生ソフトを活用し，自分の跳んだ姿をすぐに確認したり，積極的に友達とかかわり，技を確認したり教え合ったりすることで，児童のやる気やモチベーションを高めることをめざした。

③　原則Ⅲ：「取り組みに関するオプションの提供」を実行するための手立て

動画コンテンツ（器械運動（跳び箱運動）：文部科学省作成のDVDを一部編集して使用）により，体の動きを映像として見られることで，これまで言葉では伝えきれなかったことを学習者だけでなく教師も確認でき，両者のための学習教材として有効活用できるようにした。

技のポイントに関しては，教師の師範に加え，ポイントをプロジェクターに投影して確認した。大切な部分で動画がスローになりポイントが表示されるので，児童はポイントが出るたびに動作を加えながら，各々が確認することができる。児童用のタブレット端末に動画コンテンツを入れることで，児童は必要に応じて繰り返し技のポイントが確認できるようにした。

また，タブレット端末に保存した動画データは，デジタルポートフォリオとして学習のまとめや自分の学習を振り返る際の資料にもなる。前時と本時の自分の技の上達や，個人のめあてに応じた成果を視覚的に与えることで，より達成感を得ることができるよう意図した。

4　ICT活用における「協働」と「個別」の視点

協働学習というと，ペアやグループでの学習をイメージしがちである。しかし，学習過程に「協働」が組み込まれていたとしても，個別学習を通じた個の考えの形成を経ない協働学習は，いわゆる「学力が高い子ども」の考えに他が追従することが多く，結果として，学習が深まらない。「協働」学習の前段では，自分の考えを形成する「個別」学習の時間が不可欠なのである。

「個別学習」で，タブレット端末を用い，疑問をもったことや詳しく知りたいことを調べたり，自分の考えを表現したりする際には，手書き，デジタルペンでの書き込み，キーボードでの入力，イラスト，ノートやワークシートをカメラ機能で撮影したものなど，子どもが学びやすい表現の方法を選択できるようにした。

「協働学習」では，ペアやグループでの対話的な学習において，１人１台またはグループに１台のタブレット端末を用い，話し合う際の思考の可視化や，発表の根拠を提示するツールとした。また，電子黒板や授業支援ソフトを活用し，意見や考えの集約を行うことで，多様な考え方をすり合わせ，学びを広げ，深めた。

5　終わりに

このようにICTの活用は，協働学習の効果をより高め，主体的・対話的で深い学びを促進する。ひいては，児童が互いに認め合えるような学習集団を形成していくことにも繋がっていくと考えられる。

教師だけでなくすべての児童・生徒がICTのもつ「アシスト機能」を有効活用することにより，学びはさらに主体的・対話的なものとなり，あまねく深まりが実現できると考える。

◆特別寄稿◆

教育カウンセラーが実践したLINEカウンセリング

上級教育カウンセラー　飯島　修治

LINE相談の現場は，インテリジェントビルの高層階にあった。事業所ゾーンのエレベーターを降りると，ガランとした廊下の端にある受付で名簿確認をして，セキュリティカードを受け取る。ドアの脇の薄いセンサーにカードをかざし，中に入る。小さい個人ロッカーに持ち込めないものをしまう。ライン相談の部屋に持ち込めるのは，筆記用具だけである。もう一度カードをかざし，室内に入る。

対面でコンピューターのあるデスクが一列に並んでいる。相談員は10名，スーパーバイザーが１名，システムのメカニックが２名ほど。相談員はそれぞれデスクトップのコンピューターの前に座り，画面を見ながらキーボードで入力する。ディスプレイの脇にはヘッドセットをつけた電話があったが，使わなかった。

画面にはアクセスしてきた相談者の情報が映し出される。スーパーバイザーが「何番さん，対応してください」と相談者を紹介してくれる。

はじめの対応は決まっている。

「相談してくれてありがとうございます。学年と性別を教えてください」

次が，

「どんな相談ですか」

だ。相手の打ち込んできたテキストに対して，なるべく３分以内に返答してほしいと研修会で言われた。

相手の打ち込んでくるテキストを読んで，まず相手と（相談）関係を作り，相談内容を把握して，テキストで対応可能な入力内容を判断・考案して返答する。解決策が出たところで，まとめのメッセージを送り，終了する。私は２件対応した。時間にして40分から１時間ぐらいだった。

相談期間は2018年８月25日から９月７日。連日午後５時から９時まで。相談対象は都立高校生で，QRコード付き周知カードが学校を通じて配布された。希望者は自分のスマートフォンからサイトにアクセスしてアカウントを登録し，時間になったらLINEのアプリを立ち上げて相談する。

事業主体は東京都教育庁，実績のある大手のIT企業が受諾し，LINE用のメッセージツールを開発，カウンセラーは相談業務を行っている民間の社団法人から派遣される。教育カウンセラーはこの法人から仕事を紹介され，業務委託の契約書をそれぞれが書いた。教育庁の「SNS相談事業」の孫受け，雇われカウンセラーという立場である。

実施日の一月ほど前，この民間相談業務法人で説明会があり，応答構成を含む面接があった。実施日の２週間ほど前に１日研修会。LINEによるロールプレイと振り返り。これは大変有効だった。記録がそのまま残っているので，カウンセリングのロールプレイのテープ起こしが終わった段階で，そのまま点検・反省ができる。秘密保持と倫理についても話があった。

当日も，他の相談員の応答も見られるし，それまでの対応もコンピューター上からアクセス可能。私は自分が相談業務についていないときは，過去ログを見ていたが，大変参考になった。

期間中にケースカンファレンスとして研修会が１回あった。また，終了後３週間ほどして，日本スクールカウンセリング推進協議会主催の参加報告会が開催され，実践参加者８名が参加した。実施後３ヶ月ほどして，謝礼が銀行口座に振り込まれた。時間単価は教科の非常勤講師並の金額である。

LINEによるSNS相談は，テキスト（＋画像）のやり取りによる匿名性の強い相談といえる。相手の様子がわからない。対面の相談と比べて関係を作るのがむずかしい。SNS相談では，相手の状況を把握し，適切な情報提供と相談者の問題解決を支持できればいいのではないか。

その意味で，学校実践のある相談員にはメリットがある。今回のように高校生が対象の場合，相談者の背景がわかっており，情報提供もしやすいからである。相談事例は部活での問題，授業中の困ったことに関するもの，進路問題，友人関係など，学校生活に関係するものが多かった。

テキストによる相談では，文章理解と表現の能力が相談者と相談員双方に必要である。この意味で，相談がうまくいくためには，人を選ぶ相談形式であろう。

相手の様子がわからないテキストによる相談には，別の可能性もある。画面で進行中の相談が確認できるので，スーパーバイズを受けながらの相談が可能だし，１人の相談者に対して，複数の相談員が対応することもできる。相談員のチーム対応によるカウンセリングである。また，１人の相談員が複数の相談者を担当することもできる。対面・一対一の相談とはずいぶんと事情が違う。SNS相談の可能性については，試行実践と今後の研究が必要である。

【参考文献】杉原保史・宮田智基『SNSカウンセリング入門』北大路書房，2018

公認心理師試験の感想

安齊　順子
（法政大学）

1　問題数・時間・解答方式

昨年９月９日，日本大学文理学部で受験しました。試験会場は５階で，学生が授業を受ける教室でした。解答はマークシート方式で，問題は午前の２時間で77問，午後の２時間でも77問ありました。問題の後半に事例問題が出ました。

解答は選択式で，基本的には１～５から正しいものを１つ選びますが，正しいものを２つ選ぶ問題，誤りを１つ選ぶ問題もありました。事前に公表されているブループリントは，かなり範囲が広いのですが，今回はガイダンスカウンセラーの方が苦手にしていると思われる（そうでない方には，申し訳ありません）基礎心理学と，精神医学についてふれたいと思います。

2　基礎心理学の問題

基礎心理学では，例えば，スキナーを選択させる問題が出ました。スキナーはオペラント条件づけの実験を行った研究者です。この場合，例えばほかの選択肢，アドラーは個人心理学の創始者だから違う，と判断していくことを考えると，著名な心理学者とおもな研究（例えば**スキナー＝オペラント条件づけ，パヴロフ＝古典的条件づけ**）を結びつけて覚えている必要があります。

カウンセリングを勉強している方は，行動療法が，行動主義から発生したことはご存知でしょうが，その行動主義はヴントの構成主義，内観という研究方法（内観療法ではありません）へのアンチテーゼとして現れました。このような心理学の各理論の流れを把握することが，ある程度は必要になります。

ほかに，記憶に関する系列位置効果の実験内容を理解していないと正解できない問題が出ました。これも，心理学の入門書よりも，認知心理学のテキスト内容に近い設問でした。

3　発達心理学の問題

発達心理学からは，選好注視法の実験内容を知らないと解答できない問題が出ました。こちらも，発達心理学の学部の授業を理解しているという前提の問題です。これを自学自習するということになると，やはり発達心理学のテキストをきちんと読むことが必要になります。

4　認知心理学の問題と推薦図書

認知心理学について，その特徴を選ぶ設問があり，認知心理学だけではなく，例えば**ゲシュタルト心理学**などほかの心理学の特徴と比較して選ぶ設問があったため，やはりそれぞれの心理学の特徴を把握することが必要です。

【推薦図書】

現任者のための試験でしたが，現任者であっても，学部や大学院で心理学を学んだという前提の試験内容になっていました。このような内容については，『**心理学**（新版）』（無藤隆・森敏昭著，有斐閣）などのような，本格的な心理学の教科書（大学生向け）を読んでおかれることをお勧めします。誠信書房の『**心理学辞典**（新版）』もお勧めします。試験後に自己採点したときに，根拠を調べるのに辞典が必要な問題がかなりありました。

統計も，重回帰分析の問題が出ました。これは，心理学で卒論を書く場合に必要になる統計解析の一つです。こちらもカウンセリング＝心理学ではなく，カウンセリング＝臨床心理学（心理学の応用）と考えていただいて，心理学という一研究ジャンルでは，心理統計が重要視されている，と理解していただくとよいでしょう。

こちらに関しては，『**心理統計学の基礎**』（南風原朝和著，有斐閣アルマ）をお勧めしますが，こちらはいきなりではむずかしいので，漫画で説明された統計の本などで概略をつかんでから，次に進んでいただけたら，と思います。

5　精神医学の問題と推薦図書

精神医学の問題については，「**統合失調症**の特徴を以下の１～５から選べ」となっており，躁うつ病やうつ病の特徴が入り混じった項目から，統合失調症の特徴を選ぶ問題が出ました。現任者講習会テキストには，精神科の薬物療法の薬等も記載され，ページ数が多く，本格的な問題が出されると予想されましたが，予想どおりに問題が出ました。統合失調症の問題では，シュナイダーの一級症状のように，自我障害が疑われる内容と，妄想と認知の区別がついているかどうか，を試すような問題でした。

反応性アタッチメント障害の問題は，**自閉スペクトラム症**と症状が一部類似するかどうかなど，診断の細かい細部に入る問題であり，DSM-5のそれぞれの障害の診断について把握できているかを試す問題でした。DSM-5そのものを読み込むことがむずかしい場合，概要を把握する必要があります。

医師向けの本はむずかしいため，自分が使ったものと

して『＜精神保健福祉士受験版＞精神医学講義ノート（最新版）』（山根茂雄著，星和書店）をお勧めします。精神医学の教科書，入門書は多く出ていますが，公認心理師試験では，DSM-5，ICD-10に準拠したものを使う必要があります。現任者講習会テキストを読み込むことが大切だという意見もありますが，テキストはかなり内容が詰め込まれているため，それぞれの方のお好みの精神医学の入門書を読んでいくことをお勧めします。

6　生理心理学

今回「生理心理学」という耳慣れない心理学が範囲に入っていますが，これは脳に関する心理学的研究のことです。こちらは放送大学の「生理心理学」を受講するか，テキストを読むことをお勧めします。試験では，視床下部の機能を問う問題，脳幹網様体を正解とする問題が出ました。脳内の各部の名称と，その機能を把握する必要がありました。今回は出ませんでしたが，今後は，高次脳機能障害の心理検査が出される可能性があります。

7　受験対策

総合的に，予備校などからの事前の情報や，直前問題集などの情報よりも，基礎的な心理学からの問題が多かった印象がありました。また，精神医学も，付け焼刃ではない知識が求められていると思います。試験全体について私が参考にした図書は，『公認心理師必携テキスト』（福島哲夫編著，学研プラス）と『公認心理師エッセンシャルズ』（子安増生編著，有斐閣）でした。

8　私のプロフィール

最後に自分について少し述べます。私は，1987年，筑波大学第二学群人間学類に入学しました。３年生になるころ，國分康孝先生が筑波大に赴任されました。私は先生の「カウンセリング心理学」などの授業を，教室の一番前の席で受けていました。

その後，大学院に進学する際に，大塚のカウンセリングコースの大学院を考えましたが，國分先生に「あそこはすでに外の世界で教師や看護師などで働いている人の行くところ」と言われ，茨城の筑波大のほうの大学院に進学しました。学部も心理学専攻，大学院では臨床心理学を学びました。そのため，國分先生の弟子には珍しく，臨床心理士を取得し，精神病院で働くなどして現在に至りました。

昨年８月末に対策講義をさせていただいたのも，國分先生がつながれた御縁と考えています。この文章が，今後受験される皆さんのお役に立てば幸いです。

現場訪問シリーズ25

学校組織マネジメントにカウンセリングを活かす

三重県公立中学校校長　森　憲治

標題についての実践報告をさせていただく。

1　変えようとするな，わかろうとせよ

先輩校長方は，赴任してすぐに学校の教育方針を立てられているのが現状だが，初任の中学校長である自分にはなかなかできることではなかった。そこで，まずは，國分康孝先生の教えに従って，今，学校で何が起こっているのかを理解しようとした。アセスメント結果の詳細は次の機会にするが，アセスメントに基づいて，組織マネジメントの基盤を「自我関与」とした。

2　スクールワイドPBSに学ぶ

この動きは，石黒康夫先生（現：桜美林大学教授）が提案された「日本版スクールワイドPBS」に学び，参考にさせていただいた（『参画型マネジメントで生徒指導が変わる～「スクールワイドPBS」導入ガイド16のステップ』石黒康夫・三田地真実著　図書文化社参照）。そのままの導入ではないが，勤務校だけではなく小中一貫の取り組みでも活用させていただいた。

3　教育目標はマトリックス図で具現化する

本地域では小中一貫を行っており，その取り組みもスクールワイドPBSの考えで進めていった。小中学校の職員間で幾度か事前研修会を開き，現状と今後の目標を話し合ったが，私はそのたびに「自我関与」の必要性を訴えた。１年かけて理解を得て，中学校区全体で同じ学校の教育目標として動き出すことができた。

教育目標は「あたたかい心とやり抜く力を育む～子どもたちの確かな進路保障のために～」である。中学校区すべての学校が同じ教育目標を掲げている。策定後も，以下のマトリックス図に各自が思い浮かぶ姿を記入し，交流することで，自我関与を進めている。

例	あたたかい	やり抜く	進路
授業	①	④	⑦
行事	②	⑤	⑧
自主活動	③	⑥	⑨

（①～⑨へ具体的なめざす姿を記入し，交流する）

「学校組織マネジメントにカウンセリングを活かす」とは，「職員に聴き（問い）続ける」こと，「自我関与」を継続させていくことではないのか。そのように今は感じ，日々実践している。

学会活動報告

平成30年度
日本教育カウンセリング学会常任理事会　略報告

◇平成30年度第３回常任理事会

日　時：2018年９月２日（日）11:00～
会　場：早稲田大学14号館404教室
出席者：河村茂雄，伊佐貢一，小野寺正己，加勇田修士，苅間澤勇人，品田笑子，杉村秀充，根田真江，藤村一夫，水上和夫，水谷明弘，武蔵由佳，吉田隆江
欠席者：岡田弘，片野智治
事務局：高野七良見，井芹まい

○今期の学会役員の挨拶（自己紹介）

新しい常任理事がいることから，自己紹介した。

議題および報告

1　2018年度の研究発表（愛知）大会の進捗状況

・杉村大会委員より，原稿の確認，大会挨拶をする方の確認，ホテルの確認，情報交換会等の確認がなされた。
・苅間澤・前事務局長より「２次案内が配布された。愛知大会は78件の発表，参加申し込み者は120名，情報交換会は66名とのこと。大会前日研修会の受講者は現在52名である」との話があった。

2　2019年度の研究発表（早稲田大学）大会について

・苅間澤・前事務局長から，「予定でいいので，期日を愛知大会で報告したい」との話があった。

3　各委員会から（前委員長から）

・苅間澤・前事務局長より「まだ新委員会が決まっていないこと，活動が進んでいない状況であることから，前委員長から委員会の業務および推進状況について引き継ぎを話してください」との指示があった。

①　総務委員会

・小野寺・前総務委員長より「日心，日教心との会則と比較したが，齟齬はないようである。費用面で，選挙を半分の費用にしたこと，事務局の常勤をなくしたことで節約したが，事務の実働が少ないことが課題である」との話がされた。

②　編集委員会

・武蔵・前編集委員長より『教育カウンセリング研究第９巻』の査読状況について，「第９巻は７本，英文校閲，業者校正までは進んでいる。このあとは著者校正。業者校正の中で他のページとの矛盾箇所を指摘されたため，赤字で修正をした。参照したのは日本心理学会である。10巻は２本，実践報告１本，ショートレポート１本であり，継続しているのは全部で11本である。本数が足りないので積極的な投稿を」との話があった。

③　研究委員会

・水上・前研究委員長より「11月の愛知大会につなげていくように，教育カウンセリングCollegeを盛り上げていきたい。来年度は早稲田大会なので，東京支部との連携をとって，会員の参加を増やしていきたい。来年５月のシンポジウムについてもテーマを決めていきたい」との話があった。

④　広報委員会

・加勇田委員より，案内の送付完了の話があった。

4　サイエンティスト・プラクティショナー賞の受賞者について

・苅間澤・前事務局長から平成30年度のサイエンティスト・プラクティショナー賞候補者について提案があった。申告があった３名の会員のうち，基準を満たさない１名を除き，２名（原田会員，住沢会員）に同賞を贈ることが承認された。

5　委員増員について

・苅間澤・前事務局長より「常任理事14名での運営。４つの委員会にわずか３名ずつであるので，委員（委員会の手伝い）を増員したい。学会の会計も安定しているので，交通費も出せる。年３～４回程度の活動にも参加していただきたい。今後２名増員ということで進めていきたい」との提案があった。
・河村理事長より「事務局の方にもアルバイトを増員したほうがいいのでは」との提案があった。今後，学会活動を効率化することが確認された。

（文責：高野七良見／井芹まい）

◇平成30年度第４回常任理事会

日　時：2019年１月13日（日）11:00～12:00
会　場：早稲田大学11号館911教室
出席者：河村茂雄，伊佐貢一，岡田弘，小野寺正己，苅間澤勇人，品田笑子，杉村秀充，根田真江，藤村一夫，水谷明弘，武蔵由佳
欠席者：加勇田修士，水上和夫，吉田隆江
事務局：高野七良見，川俣理恵

○常任理事の委嘱について

苅間澤事務局長より，片野智治理事の体調不良による辞任に伴い，後任として，選挙で次点であった松﨑学先生に常任理事（広報委員会所属）をお願いしたいとの提案がなされ，承認された。

議題および報告

1　2018年度の研究発表（愛知）大会の報告について

・杉村大会副委員長より，資料に基づき，愛知大会について，当日の参加人数および会計報告がなされた。
・苅間澤事務局長より，自主シンポジウムやミニ研修会への参加者が少ないことから，今後，運営についても検討することが必要ではないかとの意見が出された。
・苅間澤事務局長より，前日に実施された研修会の参加者からの感想は概ね良好であったことが報告された。
・河村理事長より，今後は収益につながる研修会の開催も検討していきたいとの考えが示された。

2　2019年度の研究発表（早稲田大学）大会の進捗状況

・水谷大会委員長より，2019年度早稲田大会の日程（2019年10月５・６日），テーマ（これからの教育改革を成功させるキーポイントは何か），会場（早稲田大学16号館）等について，口頭での報告がなされた。

・河村理事長より，例年閉会式まで残る参加者が少ないことを鑑み，閉会式はせずに，開会式で表彰等を済ませる形をとること，前日研修については，当日の午前中に開催し，１泊で参加できるような予定を組んでいるとの説明がなされた。

3　各委員会から

①　総務委員会

・苅間澤事務局長より，資料に基づき，日本心理学諸学会連合への加盟について，年度会費，所属団体，定款等の内容の説明と，加盟について前向きに検討していきたいとの提案がなされた。

・河村理事長より，公認心理師制度が動き出すタイミングに加盟していることが大切だと考えられるため，総会の前にある程度手続きを進めておくこともやむを得ないのではないかとの意見が出された。

②　編集委員会

・武蔵編集委員長より，『教育カウンセリング研究第９巻』が12月に発刊されたことが報告された。

・武蔵編集委員長より，『教育カウンセリング研究第10巻』の査読状況について報告がなされ，掲載論文が７本になった段階で，発刊作業に入る予定であることが報告された。

③　研究委員会

・伊佐研究委員長より，資料に基づき，「教育カウンセリングCollege」について，６月に会津大学で実施することが提案され，承認された。

・伊佐研究委員長より，「公開講演＆シンポジウム」について，資料に基づき，説明がなされた。2019年度からの２年間は「キャリア発達を支える教育カウンセリング」のテーマで進めていくことが提案された。

④　広報委員会

・苅間澤事務局長より，広報の発行状況について，ニューズレターが３月に発行されること，HPの更新については，学会誌の掲載論文等についての情報を随時掲載していく予定であることが報告された。

（文責：高野七良見／川俣理恵）

ご案内

第17回日本教育カウンセリング学会 研究発表大会（早稲田大会）

日　時：2019年10月５日（土）・６日（日）

詳細はＨＰ：http://jsec.gr.jp/ でご確認ください。

NPO日本教育カウンセラー協会設立 20周年記念行事

日　時：2019年５月19日（日）17:00～19:00

場　所：リーガロイヤルホテル東京

＊当日の午後は，日本教育カウンセリング学会主催の公開シンポジウムが行われます。

詳細はＨＰ：http://www.jeca.gr.jp/ でご確認ください。

教育カウンセリングCollege 実践研究発表会in 会津大学

主　催：日本教育カウンセリング学会

後　援：NPO日本教育カウンセラー協会

○教育カウンセリングCollegeは，アクションリサーチ（実践研究）を学習する場です。発表したり，意見交換したりすることで実践研究の進め方を学びます。関心のある方なら，どなたでも参加できます。皆様の参加をお待ちしております。

①日　時：2019年６月９日（日）9:00～16:00

②会　場：会津大学文化研究センター（福島県会津若松市一箕町鶴賀）

③参加費：500円（会員・一般とも）

④対　象：日本教育カウンセリング学会員，教育カウンセラー（初級・中級・上級）
教育カウンセリングに興味・関心をもっている方

⑤発　表：教育カウンセリングに関する実践研究
（１つの発表の所要時間：約１時間・発表時間：20分）
※スーパーバイザー（指導助言者）による指導が行われます。

【訃報】１月29日夕方，前日本教育カウンセラー協会副会長の片野智治氏が急逝されました。片野氏は日本教育カウンセラー協会の設立に尽力され，故國分康孝会長の右腕として協会の発展に寄与されました。片野氏のご冥福を心からお祈り申し上げます。

NPO法人日本教育カウンセラー協会　〒112-0012　東京都文京区大塚1-4-15　アトラスタワー茗荷谷３F
TEL：03-3941-8049　FAX：03-3941-8116　E-mail：jim@jeca.gr.jp　URL：http：//www.jeca.gr.jp

日本教育カウンセリング学会　〒112-0012　東京都文京区大塚1-4-15　アトラスタワー茗荷谷３F
TEL・FAX：03-3941-0213　E-mail：jsec.jimu@gmail.com　URL：http：//jsec.gr.jp/

教育カウンセラー第55号　2019年３月１日発行
発行人　河野義章　編集　JECA広報委員会（加勇田修士，池場望，吉田隆江，楠元奈津子）
JSEC広報委員会（加勇田修士，水谷明弘，松崎学）
印刷　スピックバンスター株式会社